

1792年夏、パリ

——ひとりの女性が見たフランス革命——

天 野 知恵子

はじめに

「離婚が布告されます。その準備がされています。あなたはもう妻帯者ではないのよ。」1792年8月31日、ひとりの女性が夫に宛てた手紙の中で末尾をこう締めくくった¹⁾。決別を告げるかのような書き方であるが、彼女にその意図はなかった。翌日、やはり夫に宛てた手紙の最後で、昨日の一文を詫げるかのように彼女はこう書いている。「あなたを心の底から抱きしめます。私はあなたの妻よ。ずっといつまでも！」²⁾

この女性はロザリー・ジュリアン Rosalie Jullien (1745-1824) という。やがてモンターニュ派国民公会議員となるマルク＝アントワヌ・ジュリアン Marc-Antoine Jullien (1744-1821) の妻で、ほどなく47歳になるところであった。革命に心を寄せていた彼女は、離婚が可能になるような大胆な社会変革に興奮し、筆を滑らせたのである。だが社会を変える革命は、大きな代償をも伴う。ロザリーが夫への変わらぬ愛をしたためた翌日から、パリでは「9月虐殺」と呼ばれる血なまぐさい事件が起きる。そしてその時パリにいたロザリーも、凄惨な現実には否応なく直面することになった。

近年、フランス革命の女性史研究においては、オランプ・ド・グージュやロラン夫人のように後世に名を残すこともなかった女性たちが、革命の日々をいかに生きたのかをさぐる試みが行われている³⁾。その中で注目されたひとりが、ロザリー・ジュリアンである⁴⁾。夫が国民公会議員であったとはいえ自らは表立った活動をすることもなかったロザリーであるが、家族に宛てた数多くの手紙の中で、革命についてのさまざまな思いを語っているからである。本稿はそうした研究状況をふまえて1792年夏に焦点をあて、立憲王政が終わりを迎えるパリにおいてロザリーが状況といかに向き合い、どのように感じたかを紹介することを目的とした小論である。

わが国のフランス革命史研究においても、個人が革命をどう生き、革命

をどうとらえたかという視点からの考察が近年行われている⁵⁾。本稿はそうした研究の一端に連なるものである。と同時に、手紙という「エゴ・ドキュメント」を取り上げ、その文面から革命に対する書き手のいかなる思いを読みとることができるのかを検討する試みでもある⁶⁾。

1. ロザリー・ジュリアンとその家族

ロザリー(旧姓デュクロレー Ducrollay)は1745年、豊かな商人の娘としてパリ北部のポントワーズ Pontoise で生まれた。そして当時の女性としては破格の教養を身につけて成長した。ラテン語やイタリア語に通じ、フランス古典文学に詳しく、英文学をも嗜んだという。夫となるマルク=アントワーヌ・ジュリアンはひとつ年上で、ドーフィネ地方ロマン Romans の出身、父は医師で地主であった。早くから文芸に親しんだマルク=アントワーヌは、平等を説いた哲学者として知られる同郷のマブリ Mably にかわいがられ、その愛弟子となった⁷⁾。

文学の趣味をともにし、イタリア語の会話を楽しんだロザリーとマルク=アントワーヌの結婚が公表されたのは、彼らの最初の子が生まれた後のことである。詳細は不明だが、古い道徳に縛られることのない恋愛結婚であったという。義妹に宛てた手紙の中でロザリーは、「私は鳴り物入りで宣伝したくなるような男性の妻であることをとても名誉に思っています」と書いている⁸⁾。また夫の知性や徳をたたえ、自分はその指示に従うと表明している。とはいえ彼女は、家庭という「小さな共和国」において自分は夫と主権を分かち、夫とは対等であるという自覚をもっていた⁹⁾。ロザリーはまた夫の実家とも良い関係を築き、領地経営に協力して自ら果樹栽培や養蚕を手がけ、小作人たちと交渉したりした¹⁰⁾。

彼らの最初の子であるマルク=アントワーヌは1775年に生まれた。父と同名だったので、ロザリーはこの子をジュール Jules という愛称で呼ぶようになる。第二子は幼少期に死亡したが、ジュールと1779年に生まれた三男のオーギュスト Auguste は無事に育ち、長寿を全うする¹¹⁾。

ルソーを信奉していた夫妻は、子どもたちを『エミール』から学んだ教育方法で育てた。後にロザリーは、自分たちが田舎に住んだのは子どもの心身の健康を考えてのことであったと書いている¹²⁾。またロザリーは教育方法を自ら工夫した。息子たちには早くから読み書きを教え、積極的に手

紙を書かせるなどした。その甲斐あってか息子たちは勉強好きの少年になり、ジュールはやがてロザリーが「第二のエミール」を誇りに思うと書くほどに成長する¹³⁾。

ジュリアン夫妻はジュールが10歳になるのを機に、パリのコレージュに進学させることにした。当時の中産階級の男児にとって、それは珍しくない選択であった。だが息子ひとりをパリにやることはできないというので、父親も上京してパリに家を借りるとするのは、この夫妻ならではの決断であったろう¹⁴⁾。ロザリーはまだ幼いオーギュストと故郷に残ることにした。そしてこの時から、ロザリーは夫や息子に頻繁に手紙を書き送るようになった。

私の良い子ジュール、私のかawaiiそうなジュール、あなたに会わず話もせず、抱きしめることもなくなって、今日で2ヶ月と3日です。あなたのパパに対してもそう……わが親愛なる友よ、知恵や学問を身につけるために、あなたの新しい境遇から得られる利点をよく役立てるのよ。そうしたら私の犠牲も少しは辛くなるのだから……クラスであなたはどのくらいの席順なのかしら？ 先生はあなたをどんな目で見ているの？ わが良き友よ、先生の気遣いにこたえ、つとめて感謝するようにしてね……人が私のジュールの中に、徳高き父と優しく感受性の鋭い母の子どもを見出してくれますように（1785年11月8日付¹⁵⁾。

通俗道徳にとらわれない恋愛結婚、夫婦で共有される趣味や価値観、『エミール』に従った子育て、そして子どもや夫への溢れんばかりの愛情——ロザリーが作り上げたのはまさに、18世紀ヨーロッパに登場した新しい「近代家族」そのものであったと言えよう¹⁶⁾。

2. 革命の開始から1792年春まで

1785年12月にロザリーはオーギュストとともにロマンをたち、一家はそろってパリに住むようになる。そして革命が勃発した頃には、ロザリーとジュールがパリに残り、マルク＝アントワヌとオーギュストはドーフィネに帰郷していた。この間の事情はよくわからないのであるが、人権宣言が出された1789年8月後半にロザリー母子はヴェルサイユの知人宅

に滞在している。早熟なジュールは幾度か議会の傍聴に出かけて、革命に共感を示すようになっていた¹⁷⁾。

マルク＝アントワヌは開明的な思想の持ち主であったが、ロザリーもまた新しい時代の到来に期待するところがあった。というのも彼女は、王政下の社会には不満を抱いていたからである。1785年12月に夫に宛てた手紙の中では、「生まれや富を理由に、私たちの子どもはそれほど良いことも悪いこともできない階級に位置づけられています。子どもたちを徳高く育てるのは、彼らを幸せにするためであるのに」と書いている¹⁸⁾。それゆえ彼女は人権宣言の公布を喜び、89年8月27日付夫への手紙には「誰もがずっとそれを待ちわびていたのです」と感慨深げに記した¹⁹⁾。

とはいえ、他方でロザリーは89年夏に生じた出来事に対しては不安を感じていた。彼女がバステューの襲撃をどう受け止めたかは不明であるが、人権宣言の公布を知らせた手紙の中ではパリにおけるパンの不足が災いをもたらしそうだと告げ、パリが怖いと書いている²⁰⁾。10月5日と6日のヴェルサイユ行進事件も、彼女には衝撃的であった。「パリは今朝、あの有名な7月14日と15日と同じくらい動揺しています。」彼女はそれが「飢えと恐怖から」生じたものと分析し、さらに次のようにも書いていた。

ルーヴルに住むよう国王に懇願するため、新たな男女の一隊が10時にまたヴェルサイユに発ったそうです。王と一緒になくては帰ってこないのだとか……すっかり頭に血が上って、熱くなってしまって、彼らを冷静にするにはひと冬分以上の雪がいることでしょう。私は穏やかではありません²¹⁾。

人びとの怒りがどこへ向かうか、ロザリーは緊張しながら観察していた。この時期の彼女の手紙からは、革命への期待や共感よりはむしろ懸念や戸惑いの方が強く感じられる。

だが、彼女はその後変化する。改革は歓迎しつつも不安を隠せなかった89年とは異なり、革命の確かな支持者になっていくのである。そのいちばんの要因は、夫と息子の影響であったろう。マルク＝アントワヌはドローム県から立法議会に立候補して補欠議員となり、ジュールもロマンとパリのジャコバン・クラブに入会して、父子で急進派の革命家たちとの人脈を築きつつあった²²⁾。パリにいたロザリーは、二人がドーフィネにいる

時には役立つ情報を集めようと、議会に出かけたり街中を歩いたりした。そして観察の結果をたとえばジュールに次のように書いている。

人びとは憲法を賞賛し、国民議会に感服しています……外の敵をほとんど恐れていませんし、内なる敵を侮蔑しています……つまりは平穏なのです。お金が少し欠乏することがない限りは。それがすべての邪魔をしますので……私たちの粘り強さと勇氣は、あらゆるものに打ち勝つでしょう。憲法への愛が、すべての心を一種のヒロイズムにまで高めています……私は新しい体制が徳を育むことを期待しています。そのことが私を革命の崇拜者にしているのです（1791年8月11日付）²³⁾。

そんなロザリーには1792年春、心配事が生じた。ジュールが軍隊に憧れを抱き始めたのである。戦争が懸念される中、これは彼女には受け入れがたいことであった。そこでジュリアン夫妻は急いで回避策を考えた。ジュールをイギリスに留学させるというのである²⁴⁾。ジュールは提案を承諾したので、両親はありとあらゆる伝手を頼ってたくさんの推薦状を入手し、イギリスの要人への紹介状も準備した²⁵⁾。そしてジュールは92年5月半ばにフランスをあとにする。ロザリーは泣きの涙で息子を見送った²⁶⁾。

3. 危機迫る～92年5月中旬から8月上旬まで

その時期パリのロザリーのもとには、勉強のため上京していたオーギュストがいた。だがマルク＝アントワヌはドーフィネにいて、領地経営や政治活動を行っていた。ロザリーは故郷の夫とイギリスにいる息子にパリの様子を知らせようと、今まで以上にたくさんの手紙を書くことにした。そのためせっせと新聞や小冊子を読み、議会や集会を傍聴しに出かけた。自ら歩き回るだけでなく、下町には腹心の召使いをやって様子を観察させた。時には人を招いて話を聞いたりしている²⁷⁾。

おりしも戦局の悪化が緊張を招き、パリではルイ16世に対する不満が高まっていた。彼女もまた事態を懸念し危機感を抱いた。ジュールの出発を夫に知らせた5月16日付の手紙には、「……ここでは嵐が迫っています……本当の話、とても悪しき事態になっていて、敵が勝ち誇っています。

私は心配で死にそうになるのです」と記している²⁸⁾。また6月14日には、「あらゆる敵」を背景にした「国王側の卑劣さ」によって「私たちは生と死の間に置かれています」と書き、19日には「どんな災厄が私たちに迫っているか、あなたの英知でじっくり考えてみて」と訴えている²⁹⁾。

そしてロザリーはしだいに、パリ民衆に共感して王政の廃止を願うようになっていった。ロンドンの息子に宛てた7月10日付けの手紙には、「民の声は神の声ということわざには……とても大きな意味が込められていると感じます」と書いている³⁰⁾。また夫に宛てた8月5日付けの手紙には、「気の毒なルイ16世、私が彼の廃位を望むのは、その肩には重すぎる荷を下ろしてやりたいからです。この不幸な国王は、偽りの友人たちによって深淵に追い詰められているのです」と書いた³¹⁾。8月8日には、息子に対して次のように語っている。

議会は弱すぎて民衆の願いを聞くことができず、民衆は強すぎて議会に飼い慣らされることなどできないと私には思えるのです。この抗争、この争いの中から、世界にあまねく知られるようになる出来事がおきるに違いありません。2500万人の自由か、隷属かなのですから。私は情熱的な感受性と沸き立つような活力でもって、議会やジャコバンの人たちのところや公共の遊歩道へ、たびたび出かけます。どこも今の問題で沸き返っているのよ³²⁾。

ドーフィネにいたマルク＝アントワヌが、そうした妻にどう反応したのかはわからない。だが時には意見の相違もあったと思われる。というのもたとえば7月23日付けの手紙の中で、ロザリーは夫に対して次のように書いているからである。「ではあなたは、私が政治について話すのを望まないのですか？ 本当の話、それは大きな矛盾です。というのも私は、他のことには関心がないからです。私たちの財産や命に関わることと同じくらい、気にかけるのを止められないほど、公共の利益が私個人の問題なのです」³³⁾。

彼はこの時期ずっと、パリの妻のもとには帰らなかった。ロザリーは夫が多忙であることは承知しつつも、手紙の末尾で幾度もその不在を嘆き、心細い思いを訴えている。7月7日には「私たちは意図的に離婚しているような感じですね。それともあなたは亡命したか……」とさえ書いた³⁴⁾。

後に離婚法の成立を知ったロザリーが、冒頭で紹介した一文をしたためた背後には、実はそうした不満が隠れていたのかもしれない。とはいえロザリーは、諍いは心に傷を残すと考えていた上、徳高い男性を夫に選んだという強い自負から、決してそれ以上夫を問い詰めはしなかった³⁵⁾。そして家族のために手紙を書き続けた。

4. 「8月10日事件」の衝撃

1792年8月10日の早朝、義妹に宛てた2通の手紙の中で、ロザリーはこう書いた。

早鐘がなっています。非常召集がかけられ、警戒が広がっています。パリ中の街路に多くの人がいて、震える女たちが窓辺で通行人に「何が起きるのでしょうか？」とたずねています……国家の問題は私の心の問題です……あなたの個人的利益は他のすべての人と同様、全体の利益に結びついています。勇気を持って私たちを助けて。諸県が首都に同意すれば、フランスは救われるでしょう³⁶⁾。

8月10日事件が始まったのである。国王の廃位を願うパリ民衆がマルセイユなど地方から来た連盟兵とともにテュイルリ王宮を襲撃し、王宮の守備にあっていたスイス人傭兵隊と戦闘になった。そして王宮は占領された³⁷⁾。戦いが終了した午後、ロザリーは情報を求めて街中を駆け回った。そしてその日の夜、事件の詳細を夫に知らせた。

冒頭には「流血の日、殺戮の日、けれども私たちの涙がふり注がれた勝利の日です。聞いて下さい。そして身を震わせて下さい」と記した。たいへんな一日であった。「この24時間に経験したあらゆる激しい感情のために、私は魂がすり減り、やつれてしまったと感じています」³⁸⁾。だがロザリーは疲れをおして、その夜ジュールにも手紙を書いた。

驚くべきニュースです。バスティーユの奪取と同じくらい奇跡的な第二の革命がおきたの。でも私たちも血の代償を支払いました。そして24時間このかた、私たちは喜びと落胆と苦痛と怒りが入り混じった熱狂の中にいます……テュイルリはバスティーユと同じ迅速さで破壊されまし

た。報復する宮廷側の悪しき道具となった不幸なスイス人たちは、さまざまな方法で殺害されました……王宮の贅沢品はみな踏みにじられ、その贅沢な富は窓から放り出されたのです……³⁹⁾

戦闘では蜂起した側も無傷ではすまなかった。「マルセイユの人たちは自由の英雄であり、自由の殉教者になりました……」パリの民衆もまた命をかけて戦った。「女性たちはみな、正午から夜まで自分の大切な気がかりを抱えて通りで列を作っていました。そして自分の夫の腕の中へ飛び込んでいったのよ。私は胸をうつ場面を20ほども見ました……」⁴⁰⁾

蜂起はなぜ起こったのか。ロザリーは8月15日に夫に宛てた手紙の中で、「後世の人が信じたくないと思うようなおぞましい陰謀」が明るみに出たと告げ、「私は失神しそうになりました」と書いている⁴¹⁾。また8月30日には、この間の状況を振り返って次のように語っている。

考えてみて下さい。世論はとても強くはっきり示され、みなが同意して当局も軌を一にしていました。勝利が疑わしいなら確実に破滅するという中で戦い、他にもう救われる道はなく、勝つか、死ぬかだったのです。このことをドローム県やロマンの同胞たちによく言って下さい⁴²⁾。

ロザリーはこうして自らを納得させようとした。とはいえ、払われた大きな犠牲について思いをはせずにはいられなかった。戦いによって約1,000人も命が失われたのである。8月21日に彼女はこう書いた。「私は自由の殉教者たちのために泣きましたし、まだ涙しています。スイス人たちに対してさえそうです……いちばん罪が深いのは、彼らに命令を与えた者です」⁴³⁾。そして、廃位された王と王妃を「ネロとメディス」とよび、手厳しい言葉を浴びせた。8月29日付の手紙には、「ネロはまったく無頓着で、メディスの傲慢さには女性のもつあらゆる偽りの優しさが混じりあっているのです」と書いている⁴⁴⁾。

8月21日、ロザリーはランバル公妃ら王妃の側近であった女性たちが監獄に連れていかれたことを知った。30日には、聖職者市民法への宣誓を拒否した修道士たちが連行されていくのを見た⁴⁵⁾。惨劇が再び始まるうとしていた。

5. 「9月虐殺」に向き合う

「9月虐殺」とは1792年9月2日から数日間、武装した群衆がパリの牢獄に次々とおしかけ、収監されていた囚人の約半数にあたる1,300人を即決裁判によってその場で殺害した事件である。おりしも戦局の悪化を背景に、獄中の「反革命容疑者」が陰謀をめぐらせているという噂が流れていた。出征する前に禍根を断とうと、パリの民衆や連盟兵が行動を起こしたのである⁴⁶⁾。事件が始まった9月2日、ロザリーは夫にこう書いた。

……民衆は立ち上がりました。彼らは恐ろしい怒りの中で、ひじょうに卑しい裏切りが3年間にわたり犯した犯罪に、自らの正義において復讐するのです。おお、わが友よ、わが友よ、私は溢れんばかりの涙を流すためにあなたの腕の中に逃げ込みます。でも何より前にあなたに叫ぶわ、フランスは救われたのだと！……⁴⁷⁾

ロザリーもまた、反革命の陰謀が企てられていたと考えたのである。だが翌日仕事に来ていた石工たちから、昨日見たという監獄のありさまを聞いた時には震え上がった。9月3日付の夫への手紙の冒頭、「私は激しい恐怖、恐ろしさにとらわれ、どんな感情を抱くべきかわからないのです」と書いたロザリーは、石工たちから聞いた内容を次のように記している。

泥棒は殺され、アシニア紙幣偽造犯は殺され、反革命者は殺され、借金で収監されていた囚人は放たれ、喧嘩した者たちは追い払われ、軽率な行為で捕らえられていた若者たちは仲間に加えられました。そうして牢獄を完全にからにしていったのです……妨害はありませんでした。恐ろしい正義のこの新たな執行は、異常な静けさの中で行われたのです……⁴⁸⁾

牢獄の出入口には死体が山と積まれたという。収監されていた聖職者たちも犠牲になった。ロザリーは「無実だった不幸な人たち」も混じっていたと感じた。そして「殺戮へとせき立てられた民衆に神の慈悲を」と願わざるをえなかった。この日彼女は家にこもった。「私たちは玄関の敷居を越えることができません。遺体をのせた車に出会うのではないかとの恐れ

から、オーギュストと私の感性が外出を妨げるのです」⁴⁹⁾。

さらに彼女は、立法議会が弱腰で介入しようとしなかったことを見逃しはしなかった。「オルレアンでも血なまぐさい裁判が行われると言われていました。議会は囚人たちをソーミュールの城塞に連れて行くよう命じました。議会はただ議事録に事件の経過を記載しただけなのです。そして厳粛に議事を再開しました」⁵⁰⁾。

凄惨な出来事を前にして、9月2日付の手紙には「私の魂は打ちのめされました」と書いたロザリーであったが⁵¹⁾、それでもすぐに気持ちを切り替えようとしたらしい。夫宛に書かれた9月6日の手紙の冒頭には、パリも彼女も元気を取り戻したと書かれている。

愛国心が勝利しています。兵の募集と集められた兵士たちの出発が、首都に新たな命を、商業に活気を与えているのです。商人たちも再び愛国者になるに違いありません。明るさと安心感が太鼓の音とともに進んでいきます……⁵²⁾

そして彼女は、「非道きわまりない奸計が発見され、後悔をかき消しました。もし民衆が獄中にいた悪人たちを大地から一掃しなかったら、悪人たちが民衆の血で大地を汚していたことでしょう」と語り、「愛国者たちを全滅させ、ネロとメディシスに再び全権を与えるはずだった忌まわしい陰謀」の証拠が見つかったのだと報告している。それでもロザリーの手紙を読み進めていくと、活気を取り戻したという書き出しの言葉とは裏腹に、苦悩のあとがにじみ出てくる。

私たちを攻撃する者たちの卑劣さやエゴイズム、それがいつも私を毅然とさせるのです。けれどもこの一週間、私は多くの死にさいなまれて、きちんと食べることも眠ることもできませんでした。それでも元気ですよ⁵³⁾。

むすびにかえて

こうしてロザリーは1792年の夏を過ごした。彼女は教養を身につけたブルジョワで、人権宣言の公布や憲法の制定を喜び、離婚法の成立を肯定

的にとらえる進歩的な考えの持ち主であった。それでも1789年の秋には、行動をおこす民衆の姿をこわごわ眺めていた。だが1792年夏には、民衆と志を同じくし、その行いを正当化するようになっていた。

彼女を変えた要因のひとつは家族であったろう。夫も息子もジャコバン派に与して活動を始めていた。だが単にそれだけではない。手紙にたびたび書かれていたように、家族に情報を送ろうと印刷物に日々目を通し、議会やクラブに頻繁に足を運び、街の様子を観察する中で、彼女は自ら政治に強い関心を持つようになったのである。そしてその結果、パリの民衆に共感し、彼らと同じ要求を掲げるにいたった。王政の廃止、それは彼女自身が望んだことであった。

だがそうではあっても、武力が用いられ、血なまぐさい事件が引き起こされた時には目を背けた。8月10日事件の犠牲者を悼み、後に「9月虐殺」と称されることになる出来事には恐怖や嫌悪を覚えざるをえなかった。事態を正当化するためには、というよりもまずは自分自身が納得するためには、「敵の陰謀」が存在した、こうしなければわれわれが殺されていたと、何度も自らに言い聞かせる必要があった。

社会の大きな変革と流血の惨劇とが相携えるようにして生じた1792年夏のパリ。政治に強い関心を持つきっかけをつかんだひとりの女性が書き記した革命への思いは、彼女ひとりのものだったのであろうか。あるいは、他の女性たち、さらには男性たちにも共有されていたのではなかったであろうか。そして、そうした思いを読み解いていくことによって、フランス革命を生きた人びとの感情を知るひとつの手がかりを得ることができるかもしれない⁵⁴⁾。

ロザリー・ジュリアンにとっての革命は92年夏では終わらなかった。それどころか彼女の家族は、その後ますます革命との関わりを深めていく。国民公会議員となる夫マルク＝アントワヌは、ほどなく国王の裁判に臨むことになるであろう。そして愛息ジュールは、92年末に帰国するとロベスピエールの信頼を得、やがて公安委員会の特別代理人として地方の状況を視察する任務を与えられる⁵⁵⁾。そうした中、ロザリーは事態のさらなる展開にいかに向き合い、どんな思いを抱くことになるのであろうか。その点については今後の課題としておきたい。

註

- 1) Annie Duprat, « *Les affaires d'État sont mes affaires de cœur* »: *Lettres de Rosalie Jullien, une femme dans la Révolution 1775–1810*, Belin, 2016, p. 195.
- 2) *Ibid.*, p. 196.
- 3) Lindsay A. H. Parker, “Family and Feminism in the French Revolution: The Case of Rosalie Ducrollay Jullien”, *Journal of Women's History*, Vol. 24, No. 3, 2012, pp. 39–42.
- 4) ロザリー・ジュリアンは生涯に1,000通近い書簡を残している。彼女に関する最近の代表的な研究としては、上記 Duprat, « *Les affaires d'État...* » および Lindsay A. H. Parker, *Writing the Revolution: A French Woman's History in Letters*, Oxford University Press, 2013 をあげることができる。いずれも書簡の詳細な調査に基づいた研究書で、前者はフランスの革命史家 Annie Duprat による解説をまじえた書簡選集、後者はアメリカの革命史家 Lindsay A. H. Parker によるロザリーの評伝である。本稿はこの二点に加えて、近年復刊されたもう一冊を主たる資料として用いている。それはロザリーの曾孫エドゥアール・ロクロワの手によって19世紀に編集・出版された以下の書簡選集である。Édouard Lockroy (éd), *Journal d'une bourgeoise pendant la Révolution 1791–1793*, 1881, Wentworth Press, 2018 (reprint)。本稿の引用は主にデュプラの書簡選集を用いているが、これに収録されていない手紙については、ロクロワ編のものやパーカーによる紹介を利用した。なお、このロクロワ編の書簡選集をもとに書かれたジュリアン一家の評伝と言うべき次の作品があり、本稿でも参照した。Pierre Gascar, *L'ombre de Robespierre*, Gallimard, 1979 (ピエール・ガスカール、佐藤和生 (訳) 『ロベスピエールの影』法政大学出版社・1985年)
- 5) フランス革命を個人から読み解いた近年の研究として、高橋暁生 (編) 『〈フランス革命〉を生きる』(刀水書房・2019年) をあげることができる。
- 6) エゴ・ドキュメントに関する近年のわが国の研究として、槇原茂 (編) 『個人の語りがひらく歴史——ナラティヴ／エゴ・ドキュメント／シティズンシップ』(ミネルヴァ書房・2014年) や長谷川貴彦 (編) 『エゴ・ドキュメントの歴史学』(岩波書店・2020年) など参照。
- 7) Parker, *Writing the Revolution*, pp. 2, 11–12.
- 8) Duprat, « *Les affaires d'État...* », p. 18。マルク＝アントワーヌは最初の妻を1774年に亡くしてロザリーと再婚している。Parker, *Writing the Revolution*, pp. 13–14.
- 9) Parker, “Family and Feminism in the French Revolution”, p. 45.
- 10) Parker, *Writing the Revolution*, pp. 18–19.

- 11) *Ibid.*, p. 16.
- 12) *Ibid.*, pp. 24–25.
- 13) *Ibid.*, p. 26.
- 14) *Ibid.*
- 15) Duprat, « *Les affaires d'État...* », pp. 42–43.
- 16) *Ibid.*, p. 26 ; Parker, *Writing the Revolution*, pp. 40–41. 18世紀ヨーロッパの「近代家族」については姫岡とし子『ヨーロッパの家族史』（山川出版社・2008年）25–51頁、および拙著『子どもと学校の世紀——18世紀フランスの社会文化史』（岩波書店・2007年）第三章を参照。
- 17) Parker, *Writing the Revolution*, p. 52.
- 18) *Ibid.*, p. 46.
- 19) Duprat, « *Les affaires d'État...* », p. 46.
- 20) *Ibid.*
- 21) *Ibid.*, p. 53.
- 22) Parker, *Writing the Revolution*, pp. 65–68.
- 23) Lockroy (éd), *Journal d'une bourgeoise*, pp. 30–31.
- 24) Parker, *Writing the Revolution*, pp. 67–69.
- 25) ロザリーの語るところによると、ジュールはデュムーリエ、コンドルセ、ラ・ロシュフーコー、ブリッソーなどから入手した「たくさんの推薦状」を抱えて旅立った。イギリスでの紹介状としては、フランス革命に好意的であったスタンホープ伯爵をはじめ、化学者プリーストリや駐英大使ショーヴラン、外交使節としてイギリスにいたタレーランなどに宛てたものをもっていた。当時のジュリアン夫妻の豊富な人脈がうかがえよう。Duprat, « *Les affaires d'État...* », p. 84.
- 26) *Ibid.*
- 27) Parker, *Writing the Revolution*, pp. 64–66, 71–72, 84–85.
- 28) Duprat, « *Les affaires d'État...* », p. 84.
- 29) *Ibid.*, pp. 108, 110.
- 30) *Ibid.*, p. 144.
- 31) *Ibid.*, p. 156.
- 32) *Ibid.*, p. 161.
- 33) Lockroy (éd), *Journal d'une bourgeoise*, p. 194.
- 34) Duprat, « *Les affaires d'État...* », p. 138.
- 35) Annie Duprat, “Marc-Antoine et Rosalie Jullien : un couple politique durant la Révolution française”, *Parlement[s], Revue d'histoire politique*, 2019, no 30, p. 72 ; Parker, *Writing the Revolution*, p. 42.
- 36) Duprat, « *Les affaires d'État...* », pp. 164–165.

- 37) 8月10日事件については柴田三千雄『フランス革命』(岩波現代文庫・2007年)141-143頁、山崎耕一『フランス革命——「共和国」の誕生』(刀水書房・2018年)132-137頁などを参照。
- 38) Duprat, « *Les affaires d'État...* », pp. 166, 170.
- 39) *Ibid.*, pp. 171-172.
- 40) *Ibid.*, pp. 172, 174.
- 41) *Ibid.*, p. 174.
- 42) *Ibid.*, p. 192.
- 43) *Ibid.*, p. 181.
- 44) *Ibid.*, p. 187.
- 45) *Ibid.*, pp. 180, 193.
- 46) 「9月虐殺」に関しては山崎、前掲書、137-141頁を参照。
- 47) Duprat, « *Les affaires d'État...* », p. 196.
- 48) *Ibid.*, pp. 199-200.
- 49) *Ibid.*, pp. 200-201.
- 50) *Ibid.*, p. 201.
- 51) *Ibid.*, p. 200.
- 52) *Ibid.*, p. 203.
- 53) *Ibid.*, pp. 203-205.
- 54) 感情の歴史についてはリン・ハント、長谷川貴彦(訳)『グローバル時代の歴史学』(岩波書店・2016年)第3章、第4章およびウーテ・フレーフェルト、櫻井文子(訳)『歴史の中の感情——失われた名誉／創られた共感』(東京外国語大学出版会・2018年)など参照。
- 55) Parker, *Writing the Revolution*, p. 3.